
ポケットモンスター ブラック・ホワイト イッシュ地方冒険録

RION

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ブラック・ホワイト イッシュ地方冒険録

【Zコード】

Z4264Z

【作者名】

RION

【あらすじ】

主人公はカントー、ヤマブキシティ出身のトレーナー。とある大会で手に入れたチケットにより降り立つたのは見知らぬ土地、イッシュ地方。

相方のブラッキー達と共に、今日もイッシュ地方を渡り歩く。

キャラクター解説（前書き）

キャラクター解説などなど

キャラクター解説

ユウ
年齢：16歳

性別：男

出身：カントー／ヤマブキシティ

解説：本編主人公。ヤマブキシティの南東に住むトレーナー。

以前、ポケモンリーグに挑んだものの敗退をし、今は特訓の日々に明け暮れている。

使用ポケモンは『イーブイ』とその進化系7体であるが、トレーナーの手持ちは6体までなので、そのうちの2体は姉であるキヨウカが預かることとなる。

使用ポケモン：イーブイ・ブースター・シャワーズ・サンダース・エーフィ・ブラッキー・リーフィア・グレイシア

キヨウカ
年齢：19歳

性別：女

出身：カントー／ヤマブキシティ

解説：ユウの姉。自身もポケモントレーナーとしてある程度バトルをこなすことはできるものの、ユウには及ばない。

使用ポケモンはユウと同じイーブイとその進化形である。

本編では、ユウのポケモン2体を預かり、それを駆使してバトルに参加する。

使用ポケモン：ユウが使用しない2体

トウヤ

年齢：14～15

性別：男

出身：イッシュノカノコタウン

解説：ゲーム版「ポケットモンスター ブラック・ホワイト」主人公デフォルトネーム。最初に手にしたポケモンは「ツタージャ」。カラクサタウンにてNと遭遇。その後、何度も彼と戦うこととなる。使用ポケモン（#02時点）：ツタージャ

チエレン

年齢：14～15

性別：男

出身：イッシュノカノコタウン

解説：トウヤと同じカノコタウン出身のポケモントレーナー。最初に手にしたポケモンは「ポカブ」。トウヤに比べると強さという「理想」を追い求め、事あるごとにトウヤに戦いを挑むことになる。

使用ポケモン（#02時点）：ポカブ

ベル

年齢：14～15

性別：女

出身：イッシュノカノコタウン

解説：トウヤと同じカノコタウン出身のポケモントレーナー。最初に手にしたポケモンは「ミジユマル」。おつとりとした性格で、非常にマイペース。ただ、こじぞといふの行動力はトウヤ、チエレンをも凌ぐ。

使用ポケモン（#02時点）：ミジユマル

N Hヌ

年齢：不明

性別：男

出身：不明

解説：カラクサタウン似て、トウヤ達があつた謎の青年。ポケモ

ンを解放し、チャンピオンを超えると言つたその言動からは、並々ならぬ使命感を伺えるが真意は今のところ不明。

#01 Best Wish よい旅を

01 Best Wish よい旅を

この世界には、不思議な生き物たちが住んでいる。人々はその生き物を「ポケットモンスター」、通称「ポケモン」と呼称してゐる。

ある人はポケモンを家族一員のように扱い。ある人は一緒にいろいろな場所を見て回り。またある人は、戦わせ、力を鍛えたり。

そんな不思議な生き物の住む世界、ある街に住む姉弟の話は、カントー地方ヤマブキシティから始まる。

ヤマブキシティ。

カントー地方最大の都市。

町のほぼ中央にはポケモンのグッズ、トレーナーにとつて必需品となるであろう「モンスターボール」の開発を行つてゐる「シルフカンパニー」の本社がそびえたつ。

その「シルフカンパニー」を横目に一人の女性が籠を手に歩いている。

栗色の髪を肘のあたりまで伸ばし、のんきに鼻歌を歌いながら。買い物だろうか、籠からはメモが顔をのぞかせている。

「いよいよ、キヨウカちゃん。買い物かい？」
「ええ、ちょっとカレーを作ろうと思つて」

「作ろう？… つふ、『作つてもりおつ』の間違いじゃないのかい？」

彼女に声をかけた初老の男性が冗談交じりに言葉を発する。キヨウカと呼ばれた女性は、ほほを膨らませる。

「間違いぢゃないですー！ 今日こなはちゃんとしたカレーを作りんですから！」

「ハハツ、まーたコウくんに怒られないようにな！」

「むうい……」

キヨウカは男性との会話を済ませると、商店街へと足を進める。一番の都会とは言え、おそらく買い物をするならば隣町である「タマムシシティ」の方が物は揃うだろう。だが、ここには見知った人たちが温かく迎えてくれている。

買い物をするときに、どれが良い商品か、などを丁寧に教えてくれる。

そんな商店街なのである。

キヨウカはメモに書かれているものを一通り購入、帰路につこうとした。

「ああ、待つて、キヨウカちゃん

八百屋の女店主に呼び止められる。

振り向いたナユカに手に渡されたのは2枚のチケットだった。

近々ヤマブキシティでは「シルフカンパニー」主催のポケモンバトルの大会が開かれるのだ。

渡されたのはその参加チケット。

キョウウカも、たしなむ程度にはポケモンバトルを行うことができる。

ただ、弟の「彼」ほどではないが。

「ユウくんと一緒に出てみたらどうだい？ ちょうど明日日曜日だし」

「んう……でも私弱いから、ユーくんに出てもらおうかしら」

キョウカはチケットに書かれている事項に目を通した。

参加ポケモンは3体、先にすべてのポケモンを戦闘不能にしたトレーナーの勝利。

大会開催中のポケモンの交換は認められず、最初に選んだ3体で最後まで戦い通さなければならぬ。

その他、細かい参加資格等も書かれている。

なお商品は。

「優勝賞品、イッシュ地方への旅行券！？」

「イッシュ地方って最近話題の地域でしょ？ あたしも若ければ旦那を連れて行つたんだけどねえ……」

そんな冗談を耳に、キョウカはチケットに再び目を向ける。このチケットが、のちに一人を冒険の旅へ誘うことにならうとは。

＊＊＊
ヤマブキシティの郊外に建つ一軒家。

幼い時に家族全員で住んでいたこの家も、現在は一人住まい。

両親は自分が7つのときに他界している。

それから今まで、町の人たちに助けてもらひながら生きてきた。
そんな一軒家の庭で、彼はポケモンと戯れていた。

「ただいまー」

敷地に響くキョウカの声。

彼は腰をあげ、玄関に向かう。

キョウカと同じく栗色の髪が、外に跳ねるよつに血口狂張している。

服装はジーパンにTシャツといった普通の服装。

その足元には8匹のポケモンたちキョウカの帰りを待つかのように存在している。

しんかポケモン イーブイ。
ほのおポケモン ブースター。
あわはきポケモン シャワーズ。
かみなりポケモン サンダース。
たいようポケモン エーフイ。
げつこうポケモン ブラッキー。
しんりょくポケモン リーフィア。
しんせつポケモン グレイシア。

「ゆーくん、カレーの材料買つてきたよー!」

彼の名前はユウ。

この家の家事を担当している、ポケモントレーナー。

過去にはポケモンリーグ、セキエイ大会にも参加したことがある。

ただし、優勝はできなかつた。

その時の彼の実力では、優勝など到底無理だつたのだ。

それからと言うもののリーグには出場せずに、ただひたすらに自分自身と、ポケモンの実力を磨くことに専念していた。

「で、今日はどれだけ道草を」

「道草食つてないですー。今田はゆーくんに良いお知らせ持つてき

たんだから」

そう言つて手渡したのは、先ほどのチケット。

ユウはチケットに目を通す。

シルフカンパニー主催の大会。

ユウにとつては実に久しぶりの大会である。ルールも実際にオーソドックスなもので、参加しやすい大会となつてゐる。

「まあ氣分転換には、良いんじやないかな?」

「… そうだね。出てみようか、みんな?」

イーブイ達が声を上げる。

彼女達も、久しぶりの大会ということ

* * *

4日後、日曜日、午前8時30分。

この日は晴天で、大会を行うには絶好の日和だつた。

シルフカンパニーの屋上に設けられた特設会場には、参加を求めてトレーナーが並んでいる。

とはいって、参加人数は16人。

町の小さな大会ならば集まつたほうである。

ユウも受付を済ませ、番号の書かれたバッジを胸に付ける。

今回の大会は、最初に選んだ3匹のポケモンで最後まで戦わなければならない。

その意味では最初の一戦が非常に大事なものとなつてくる。

ユウは悩んだ。

さまざまなタイプのポケモンに対抗できる手持ちをどうするか。

初戦敗退という結果だけは避けたい。

その一心で、イーブイ達を見る。

まず先手は、ほとんどの相手から先手を取れるサンダースを選択。サンダースの素早さならば、先手ダメージを取りやすい。

ただし、心配しなければならないのは唯一、サンダースの攻撃を無効にできる「じめん」タイプのポケモンの存在。

互いのポケモンを見せ合うタイプの試合形式ではないので、そこまで心配することもないだろう。

ただ、万が一ということもある。

そこで次に選出したのはリーフィア。

リーフィアならば「じめん」タイプの攻撃も十分に耐え、さらに突出した物理耐久で物理攻撃によるダメージも抑えられる。さて、じめんになると最後の三体目である。

その時、元気よくユウに対してアピールをしたポケモンが一匹。プラッキーである。

コウが初めて手に入れたイーブイが進化したブラッキー。

イーブイ達の中では一番長い付き合いである。

ブラッキーの能力を考えれば、二番手に持つてくるのはアリなかもしねり。

「…仕方がないか。二番手はブラッキー、君に決めた！」

三体のポケモンを選出したコウは控室にて出番を待つ。トーナメントが始まる。

白黒のポケモンを競わせ、激しいバトルを繰り広げていくトーナー達。

あるトレーナーは勝利を喜び。

また、あるトレーナーは敗北を悲しむ。

バトルである以上、どちらかが勝ち、どちらかが負けるものである。

順調に試合が進む中、コウの出番がやつてきた。

ステージに進む足は重く、手が震える。

この緊張感は、いつまで経っても慣れないと。

歓声とともに、審判が両トレーナーの名前を読み上げる。

「赤コーナー、ヤマブキシティ、コウ選手！ 緑コーナー、ハナダシティ、トウカ選手！ ルールは先に相手のポケモンをすべて戦闘不能にした選手の勝利となります！ 準備はよろしくですか？」

『はいー。』

「それでは、第5試合！ 試合開始！」

モンスター ボールの中から飛び出すサンダース。
相手が繰り出したのはガブリアス。

初手からなかなか強力なポケモンを繰り出してきたものである。

「サンダース、めざめるパワー！！」

サンダースの周囲に透明かかった光が収束され、ガブリアスに向かって放たれる。

『めざめるパワー』、それはポケモンの持つ能力ごとにによってタイプ・威力ともに異なる不思議な技。

サンダースが放ったのは『こおり』タイプのめざめるパワー、ガブリアスにとつては強烈な一撃を見舞うことができる。

相手は交換するだろうと考えていたのか、ガブリアスが倒れるのをただ見ているしかなかった。

まずは一体。

トウカが次に繰り出したのは「みず・でんき」タイプのウォッシュ
ユロトム。

サンダースのメインウェポン『10万ボルト』が等倍ダメージとなる。

さらにはその高い能力から繰り出される攻撃のどれもが思い一撃となる。

「ロトム、トリックよ！」

ウォッシュユロトムが謎の念力を発する。

その念力につかまつたサンダースとウォッシュュロトムの持ち物が入れ替わってしまう。

ウォッシュュロトムが持っていたのは『『こだわりスカーフ』』。

サンダースの持ち物『『いのちのたま』』が取られ、火力が下がっただけでなく『『こだわりスカーフ』』の効果により同じ技しか繰り出せなくなってしまった。

ただし、このコンボにも弱点がある。

「サンダース、10万ボルト！！」

サンダースの体から、強烈な電流がウォッシュュロトムへと発射される。

『『こだわりスカーフ』』の効果で縛られるのは、『『こだわりスカーフ』』を手に入れてから放たれた技に縛られる。

つまりところ、この場合サンダースはまだ『『10万ボルト』』で攻撃をすることができたのである。

その上、『『こだわりスカーフ』』により、素早さが格段にアップしている。

もはやサンダースを超える素早さを持つポケモンは数えるほどしかいない。

最後にトウカが繰り出したのはカイリキー。

そのパワフルな攻撃は波の防御力のポケモンならばねじ伏せてしまふ。

サンダースが『『10万ボルト』』を放つ。

電撃をまともに食らつたカイリキーだが、不敵な笑みを浮かべる。

「カイリキー、ばくれつパアアアアンチッ！！」

4本の腕から繰り出される重いパンチ。

サンダースの体が吹き飛ばされ、戦闘不能に陥ってしまった。

通常『ばくれつパンチ』は命中率の低い『かくとう』タイプの大技。

ただし、それを補つてするのがカイリキーの特性「ノーガード」である。

これにより、相手と自分の技はたがいに必ず命中するようになっている。

（正直、じわれじやなくて良かつたけど……サンダースの防御ならびにしろ耐えないか）

ユウが次に繰り出したのはリーフィア。

相手はすでにカイリキー1体。

リーフィアの物理防御、そして持ち物「ゴジゴジメット」による反射ダメージならば十分勝機はある。

「リーフィア、リーフブレード！」

「カイリキー、ばくれつパンチ！」

二つの技が正面からぶつかり合つ。

その衝撃で吹き飛ぶリーフィアとカイリキー。

次の瞬間、倒れたのはカイリキーだった。

リーフィアは多少のダメージを受けてはいるが平気な顔で立つている。

「カイリキー、戦闘不能！ リーフィアの勝ち！ よつて、勝者、ユウ選手！」

歓声が巻き起こり、ユウとトウカが握手を交わす。

1回戦をとつぱしたユウは、その後も勝利を重ねていき、準決勝までたどり着いた。

準決勝の相手は小柄な少女だった。

黒いキャスケットに、黒のロングスカート、黒のブーツに身をまとっている。

「赤コーナー、れい選手！ 緑コーナー、ユウ選手！ 試合開始！」

「いけっ！ サンダース！！」
「いけー、サンダース！」

双方共に繰り出したのは同じサンダース。素早さもどちらが早いか想像もつかない。

ただし、サンダースの特性『ちくでん』により、『でんき』タイプの技は吸収され、サンダースの体力が回復してしまった。こうなった以上、ユウのサンダースが放てるのは『シャドーボル』、もしくは『めざめるパワー』のみ。

サンダースが動いた。

先手を取つたのは、れいのサンダース。サンダースの瞳が光り、体を包み込む。

「ひかりのかべ、か…！」

サポート技『ひかりのかべ』により、特殊攻撃のダメージが無条件で減少してしまう。

コウのサンダースの放つ『シャドーボール』は、相手に命中する前に輝く壁にかき消されてしまう。特殊攻撃技しか持たないサンダースのままでは、相手に碌なダメージを与えることができない。

交代をし、リーフィアが飛び出す。しかし、相手もそれを読んでいたのか。

「サンダース、でんじはだよ。」

サンダースの放つ『でんじは』により、リーフィアがマヒします。

マヒ状態となつたリーフィアの素早さは下がり、行動が制限されてしまう。

リーフブレードを打とうにも、下がつた素早さのせいで動けない状態が続く。

その後、相手のサンダースが下がり、出現したのはブースター。こちらの手持ちでブースターに対抗できるのはサンダースのみ。リーフィアは相性の関係で不利に、ブラックキーも決定打がないめである。

しかしながら素早さが下がっているからと言って、リーフィアの物理防御力ならば、ブースターの一撃を耐えることができるかもしない。

その上、『ゴジゴジメット』装備のため、微量ながら反射ダメージを与えることもできるだらう。

その読み通り、ブースターが先手を取り、リーフィアに対して突撃する。

炎を纏つた突進、『二トロチャージ』。

残り火を纏つたブースターの素早さが上昇する。

リーフィアは身に付着した火の粉を振り払うと、『リーフブレード』で反撃をしようとするが、マヒの症状により動くことができない。

そのまま2発目の『二トロチャージ』をまともに喰らったリーフィアは、戦闘不能に陥る。

「どう、私のブースターは？」

「ぐぬぬ…」

確かに凄い威力だ。

リーフィアの防御力を持つてしてもあのダメージ。

やはりイーブイの進化形の中でも最高クラスの攻撃力である。だが、ユウは気になっていた。

『二トロチャージ』を放つた後、ブースターが『ゴツゴツメット』以外のダメージを受けていた。

（あれは、毒のダメージに似ていたけど…どうどうだま？）

これが何を意味しているのか、彼には分からずにいた。

考えても仕方がない、ユウはサンダースを繰り出す。

ここは『10万ボルト』を指示したいところだが、後ろには相手のサンダースが控えている。

『めざめるパワー』も『じおり』タイプでは通用しない。

「サンダース、シャドーボール！」

サンダースが黒い球体を打ち出すよりも早く、ブースターが駆け

抜ける。

すでにブースターの素早さは、サンダースを超えていたのだ。
繰り出した技は状態異常時に威力が倍近くに跳ね上がる「からげんき」。

サンダースの急所に命中し、その体が吹き飛ばされる。
残る手持ちはブラッキーのみ。

ブースター自身も『じへじへだま』の効果だろうか、もう体力が少ないように見える。

万事休す、か。

その時だ、田の前のブラッキーと田が合図。
ブラッキーは諦めてはいなかつた。

どんなに不利な状況でも、ブラッキーは。

ふと、こんな言葉がよぎる。

『諦めたらそこで終わり。それが結果になる』

昔、近くに住んでいた男が言つていた。
じくりと頷くブラッキー。

それに答えるしかない。

「...いよしー いけつ、ブラッキー!...」

ブラッキーが勢いよく飛び出した。

15時。

コウの田の前では表彰式が行われていた。

自分は表彰台に立っていない。

結局、準決勝で負けてしまったのだ。

あの後、ブラッキーは善戦しブースターを倒し、サンダースをあと一歩のところまで追い込んだのだ。

良くやつてくれたと、褒めてやるとブラッキーはコウの顔に自分の顔を近づけた。

慰めてくれているのだろう、そんな気がした。

これで、大会は終わり。

明日からまたいつも毎日に戻るのだ。

そう思っていた。

「あ、いたいた。あのー」

「はい?」

コウが振り返るとそこには準決勝で戦った、れいが立っていた。その手には優勝賞品であるイッシュ地方へのチケットが握られていく。

「…優勝おめでとう、れいさん。やっぱ強かったよ、戦つてわかるもの」

「君も、君のイーブイズも強かったよ？ 楽しかったし。それでね、良かつたらこれ貰ってくれないかな？」

そう言つて差し出したチケット。

コウにとつては受け取つていいものかどうか、判断が鈍る。

「いいの、いいの。イッシュ地方だつたら何度も訪れてるし、まだこつちに用事があるし。何より、楽しいバトルをしてくれたお礼に！」

「…ありがとうございます！」

そう言われては断る理由が見当たらない。

後ろで見ていたキョウカも、嬉しそうである。

何より、ユウの周りに座っていたイーブイ達もほしゃいでいる。

「さつそく、今週末にでもイッシュ地方に行こう、ゆーくん！」

「だね。早い方がいいかもしないし」

「あ、そうそう。最後に言い忘れていたわ。あつちではこのいつ言つ時、言つ言葉があるの」

れいが改めて息を吸う。

「Best Wish! 良い旅を！」

そんなことがあつたのが4日前。
ユウとキョウカは現在イッシュ地方への連絡船を降りたところだつた。

カントー、クチバシティより出向した連絡船が到着したのはイッシュ地方一の大都会、ヒウンシティ。

さまざまビルが立ち並び、ヤマブキシティよりも人が賑わい、
都会の空気が流れている。

「ふえー、すごいねー」

「カントージャ セウソウ見られないよなあ…」の景色」

その話をしていると、一人の少年が声をかけてきた。

「すいません、もしかして貴方達はカントーから？」

「…？ そうだけど」

「へえ、よくもそんな田舎から来たものだね」

少し刺を含んだ言い方にユウとキヨウ力は眉をひそめた。
ああ、これがイツシユ地方の人間の挨拶の一つなんだろうなあ。
そう誤解をするところだつた。

「よければ、ポケモンバトルの相手をしていただけませんか？ これからジムに挑戦するんで」

「へえ、準備運動つてやつ？ 中々挑発的じゃない、君つて」

「セウソウですか？ そんなこと言われたこともないんですけどね」

一人がボールを構える。

辺りにピリピリとした空気が流れ。

「そうだ、君の名前は？ 戦う相手の名前くらい知つておかなきゃ」

ユウが相手に尋ねる。

「僕はシユーティー、お手柔らかに」

「シユーティー、ね。それじゃ…バトル、行くぞ…！」

いつして、ユウとキヨウカのイツシユ地方冒険の旅が幕を開けたのである。

02 Nの来訪

ヒウンシティに到着したコウとキョウウカを待つていたのはイッシュ
ユ地方トレーナー、シュー・ティーとのバトルだった。
序盤、シュー・ティーが繰り出したのはハトーボー。
コウが繰り出したのはエーフィだった。

エーフィが先手を取り、『サイコキネシス』を発する。
年パにより身動きが取れなくなつたハトーボーは、そのまま地面
にたたきつけられる。

だが、それだけで終わるような相手ではなく、即座に『つばめが
えし』で反撃を仕掛けてきた。

『つばめがえし』は必中技、その素早い動きで相手を翻弄し隙を狙
つて斬りかかる。

「カントーのトレーナーがどれほどのものかと思つたけど、やっぱ
り君もその程度なんだね」

「君も…？ まるで前にも俺みたいなトレーナーと戦つたような口
ぶりじゃないか」

シュー・ティーが笑みを浮かべる。

彼は何度かカントーのマサラタウンから来たという少年と対決し
たという。

何度も戦つたものの、彼はシュー・ティーに勝てず、現在もジムめ
ぐりをしながら顔を合わせるたびにバトルを挑まれる。

「つと、ついお喋りをしてしまったね。ハトーボー、でんこいつせつか！」

ハトーボーが猛スピードで飛来する。そのスピードにエーフィは翻弄されてしまった。

『でんこいつせつか』が命中するものの、未だエーフィが倒れるまでには至らない。

2発目の『サイコキネシス』が命中し、ハトーボーが戦闘不能に陥ってしまう。

「戻るんだ、ハトーボー。ふん、なかなかやるじゃないか…だが！」

シューイーが2体目に繰り出したのはブルンゲル。

『水・ゴースト』タイプを持つ、耐久に優れたポケモンである。

「エスパートタイプにはゴーストタイプ、基本だろ？」「確かに…もどれ、エーフィ！」

交代をし、繰り出したのはブラッキー。

『ゴースト』タイプに有利『あく』タイプを繰り出す。

まず、攻めたのはブラッキーだつた。

体中の黄色い模様があやしく光り輝き、ブルンゲルを混乱させる。ブラッキーの『あやしいひかり』により混乱の症状に陥ったブルンゲルだが、危なげながらもブラッキーに攻撃を仕掛ける。

ブラッキーがブルンゲルの放った『どくどく』を喰らい、猛毒状態となってしまう。

しかしながら、ただでは転ばない。

ブラッキーの特性である『シンクロ』により、ブルンゲルも同様に猛毒状態となってしまう。

混乱と猛毒という状態異常を受けてしまったブルンゲル。

次の攻撃を仕掛けようとするが、混乱の症状により自分に攻撃をしてしまう。

その上、猛毒のダメージである。

長期戦は不利な状況に陥り始める。

ブラッキーとブルンゲル、どちらも耐久に優れたポケモン同士の戦い。

こうなると如何にしてダメージを抑えるかが勝負の決め手となる。幸いなことに、コウのブラッキーは『つきのひかり』を覚えている。

猛毒によるダメージを、見誤らなければ勝機はこちうこあると言つたところだ。

現に、シュー・ティーのブルンゲルは回復技を覚えていないようだ。混乱による自分へのダメージと、猛毒によるダメージでじわじわと体力が減っていく。

数分の後に、ブルンゲルが氣を失い倒れてしまつたのは言つまでもない。

「ブルンゲル！？ …くつ」

「さ、次の手持ちを …」

「残念ですが、僕の負けです。これからジム戦と言つのに、これ以上こちうの被害を大きくしたくありませんから」

そう言つてブルンゲルをボールに戻す。

予想以上に苦戦を強いられたと言つたところだろう、悔しそうに

顔を歪ませる。

「まあ、君が負けたというならそれはそれでいいけど…、ただ、自分から仕掛けておいて相手を挑発して、ジム戦があるからって言うのはちよつと相手に対しても失礼じゃないかな？」

「……」

シュー・ティーは黙つたまま。

彼も流石にそのことに関しては反省をしているようだ。
コウはそれ以上何も言わなかつた。

「…でも、そんな気持ちじゃ今からジム戦に挑んだって、いつもの実力なんか発揮できないさ、切り替えなきや…」

「…はい。あの、もしよかつたらまた今度バトルをしてくれませんか」
「おう、良いよ。次に会つたら、6体6のフルバトルでも、ダブルバトルでも、何でも引き受けたげるよ」

シュー・ティーは一礼をすると、走り出していった。

「先輩トレーナー、つて感じじゃなーい？」

「姉さん…やめてよ」

「ふふつ。で、どうするの、これから」

せつかくイッシュ地方に来たのだ、このまま帰るのはもつたいたいな
い。

改めてチケットを見ると「無期限滞在チケット」となつていて。
無期限滞在となると値も張るだろ？に、こんなチケットを優勝賞品にできるとは。

流石は世界的に有名なシルフカンパニーである。

無期限となつてゐるのならば、イッシュ地方のジムの一つか二つ、いや、八つには挑戦しておきたいところ。

前日に入購入していた「イッシュ地方を歩きつくすガイドブック」とやらには、「編集部お勧めジム巡り」とこいつ「コーナー」が設けられていた。

それには八つのジムを巡りつつ、イッシュ地方の各所を歩くとこつた趣面で紹介文が書かれていた。

ジム巡りの順番はこうだ。

サンヨウジム、シッポウジム、ヒウンジム、ライモンジム、ホドモエジム、フキヨセジム、セツカジム、そしてソウリュウジム。それぞれジムリーダーの写真付きで、この八つのジムが紹介されていた。

ここから近いのは、言つまでもなくヒウンジムである。

ただ、コウはぱざつしても一つ田のジム、つまり「サンヨウジム」から挑戦したかった。

ヒウンシティからサンヨウシティまでの道のりは「スカイアロー」ブリッジ やグルマの森 シッポウシティ サンヨウシティ」と少々遠い。

しかしジムバッジを順番に集めるといつ、謎の拘りのためだ。仕方がない。

いづしてコウとキヨウカの次なる目的地が決まったのだ。

「ねえねえ、このカミツレをもつてジムリーダー、すつ」「こ可愛いよー モデルさんもしてゐるんだつて」

「フウロさん可愛いだろ」

そんな話をしながら、ヒウンシティを後にしたのだった。

* * *

さて、話は少し遡る。

コウたちがイッシュ地方にたどり着く前の日のこと、カラクサタウン。

先日、生まれて初めてのポケモンをプレゼンされ、カノコタウンを旅立つたトレーナー達がいた。

トウヤ、チエレン、ベルの3人である。

3人は昔からの友達であり、今回イッシュ地方のポケモン学の権威であるアララギ博士からポケモンをもらつて旅に出たのだ。

トウヤはツタージャを、チエレンはポカブを、ベルはミジユマルをそれぞれ受け取り、これから先に待ちうけるたびの数々に期待を膨らませながら歩き始めた。

しかし、カラクサタウンに着くや否や、妙な人間が待っていた。

「君のそれ、モンスター ボールだよね」

帽子を深く被つた緑髪の青年がトウヤ達に声をかけてきたのだ。

トウヤは察した。

何か、得体のしれない恐怖に似た感覚。

返事をしちゃいけない、自分の頭の中で警鐘が鳴り響く。

「君達は何も考えず、ポケモンをモンスター ボールという檻に、閉じ込め道具のように扱っているらしいね」

「何が、言いたいの?」

トウヤが口を開いた。

青年は続ける。

「ここの世界は不完全だ、人間も…ポケモンも…そしてポケモンは人間に虐げられている。分かるかい？」

「あうう…私には何の事だかさっぱりだよお…」

「それが人間の限界さ。不完全な、ね？」

「メンドーな奴だな…何が言いたいのさ。はつきり言えばいい！」

ベルは困惑し、チエレンは苛立つている。

ただ、トウヤだけは平静を装い、相手の出方を窺う。

「君のポケモンの声を聞かせてもらいたい
「僕…の？」

青年がトウヤに近づき、モンスター・ボールに手を伸ばす。
咄嗟に避け、1歩2歩下がる。

そんなトウヤにチエレンが耳打ちをする。

「トウヤ、こんな奴相手にする必要ないよ。大体、カノコタウンを出ですぐにこんな奴にかまつていたら時間がいくらあつても足りないよ」

「そうかもしれないけど…」

「ふえ？ まさか、トウヤ…」

トウヤが青年と対峙する。

モンスター・ボールに手をかけ、ボールを構える。

青年もそれに応えるように身構えた。

しかし、ボールを投げる様子がない。

「いけ、ツタージャ！」

「僕のトモダチ、チヨロネコー 力を貸してくれ！」

言つと青年の後ろから飛び出したのはチヨロネコだった。
ボールを投げずにポケモンを操ると言つのだろうか。
そんな馬鹿な話があるはずがない。

野生のポケモンは、人に襲いかかると言つのに。

トウヤは目の前の状況に頭の中がグルグルと渦を巻く錯覚を覚える。

「ボールなんて道具は必要ない…僕とこのチヨロネコはトモダチだからね。もちろん、この戦いが終わったら野生に戻すつもりだよ」「くつ……迷つてなんかいられない！ ツタージャ、つるのむち！」

「！」

ツタージャの体から2本のツルが伸び、チヨロネコに襲いかかる。
その軌道を読み、チヨロネコは高く飛びあがる。
繰り出したのは鋭い爪で相手に攻撃をする『ひつかく』攻撃。

「ツタージャ…！」

「君のポケモンは可哀想だね」

青年の言葉に、トウヤの動きが止まる。

「君という未熟なトレーナーに使われ、傷を負い…実際に可哀想だ」「…どうしても…！」

トウヤの気迫に、ツタージャが駆け抜ける。

その視線はまっすぐにチョロネコを見据え。

田にもとまらぬ速さで、チョロネコの脇を駆け抜けた。

瞬間、チョロネコがグラリと倒れこんだ。

「…リーフブレード…！？ そんな技を放てる力量じゃないはずなのに…」

「僕はこれからもツタージャと、ううん、旅であつたポケモン達と一緒に旅を続けるよ」

ツタージャを抱き上げる。

傷を負つてしまつたが、戦闘には勝つた。

チエレン、ベル以外の人間との初めてのポケモンバトル。不格好だったかもしれない、酷かつたかもしれない。

ただ、これは貴重な一勝である。

それはトウヤにとって、ツタージャにとって、貴重な。

「君が、これから先に僕達と何回も出合つて、同じことを言つたとしても。僕の気持ちは変わらない…だって、ポケモンと一緒に旅をするのが僕の「夢」だから！」

「…分からないな。君のそんな自己満足な「夢」なんかにポケモンを付き合わせるのかい？ 僕には分からないな…」

「分からなくていいよ。人の考えは色々あるもの。僕はそれを否定するつもりはない！」

「…なるほどね」

青年が、チョロネコを抱えると、そのまま野生に返して。

「僕の名前は…ヒヌ。全てのポケモンを開放し

一瞬の空白。

「チャンピオンを超える男だ」

「の出でこが後に、イッショ地方の運命を握るにこなれりとな。

トウヤも。

チヨレンも。

ベルも。

今はまだ知らずにいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4264z/>

ポケットモンスター ブラック・ホワイト イッシュ地方冒険録
2011年12月17日20時47分発行